

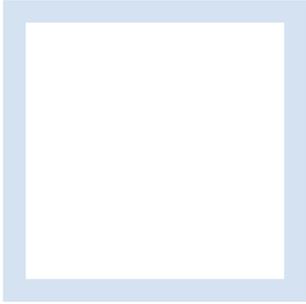


OSAKA

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる！

日本も元気にする
JICA海外協力隊

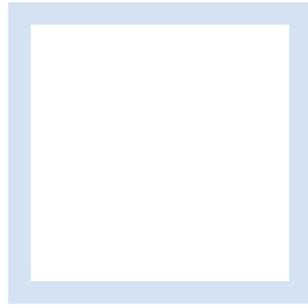
関西編



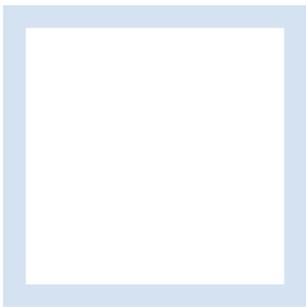
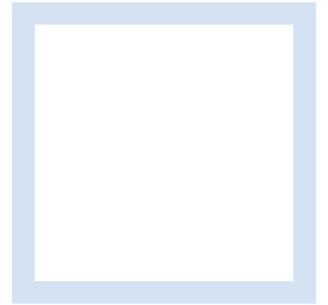
OSAKA



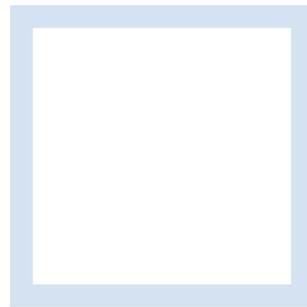
HYOGO



HYOGO



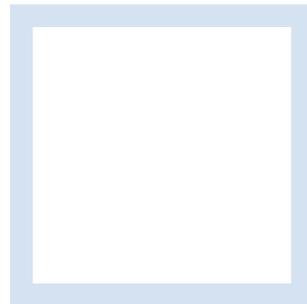
KYOTO



WAKAYAMA



NARA



SHIGA

世界を元気にした人だからこそ、 日本でできることがある。

「開発途上国を元気にしたい」と

JICA海外協力隊に参加した人たち。

海外でのボランティア活動を終えて帰国した彼らは、

現在「日本の地域を元気にする人財」として、

関西で活躍しています。

彼らの活動を通じて、JICA海外協力隊を

さらに理解していただければ幸いです。



食べ物の安全を確かめて、人々の健やかな暮らしをサポート。

米村 未奈子さん

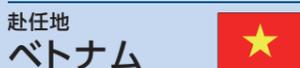


大阪府枚方市
枚方市保健所
食品衛生監視員／薬剤師



世界中の“障がい”のある人々を支援し、一人でも多く笑顔にしたい。

宮嶋 愛弓さん

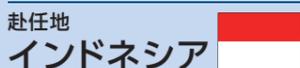


大阪府大東市
四條畷学園大学
リハビリテーション学部 講師



より伝わるようにすることで、社会に様々なベネフィットを届ける。

織田 芳孝さん



兵庫県伊丹市
オリタ企画(個人事業主)／
フォトグラファー



常にマイノリティの視点を持ち、社会から取りこぼされる人々を救いたい。

山口 まどかさん



兵庫県神戸市
NPO法人
多言語センターFACIL



答えのない課題に対して自分で考え、行動する力を身につけてほしい。

新井 教之さん



京都府京都市
京都教育大学附属高等学校
地理歴史科教諭

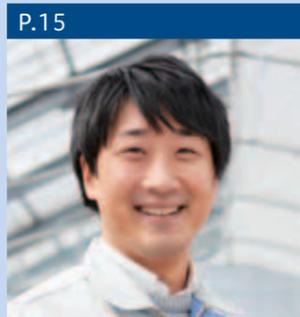


地域の人々の健康を支え、安心できる医療を届けたい。

笹川 恵美さん

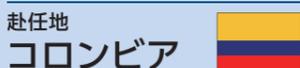


和歌山県橋本市
医療法人南労会紀和病院
診療放射線技師



栽培しやすく美味しい野菜づくりと食文化を豊かにする手伝いを。

戸口 誠仁さん



奈良県天理市
大和農園
種苗販売部



疑問を持ち、考え、行動できる国内外で広く活躍する若者を育てたい。

加朱 将也さん



滋賀県東近江市
滋賀県立八日市高等学校
保健体育科教諭

食べ物の安全を確かめて、 人々の健やかな暮らしをサポート。



米村 未奈子

MINAKO YONEMURA

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
食品衛生

大阪府枚方市

枚方市保健所 食品衛生監視員 / 薬剤師

大学卒業後、食品メーカーに就職。翌年、公務員試験に合格し、保健所にて食品衛生監視員として勤務を始める。およそ5年、食の安全を守る。検査を積み重ねた後、ボランティア活動にもともと興味があったこともあり、JICA海外協力隊に応募。現職派遣制度を利用して参加する。

小学生から今もずっと、誰かのために役立ちたい思いで—。

約40万人が住む中核市・枚方の保健所で、米村さんが従事するのは、食品衛生や感染症、環境衛生に関する微生物や食品添加物の検査業務だ。管轄区域で提供されたり、販売されている食品に、害を及ぼす微生物はいないか、表示にない添加物が入っていないかなどを調べている。

小学生の頃からガールスカウトでボランティア活動をしていた米村さん。そこで、物資に恵まれない国の子どもに文房具を送るピースバック

プロジェクトに参加。文具を受け取った子どもからお礼の手紙があり、また誰かの役に立ちたいと思うようになる。

高校時代の友人がJICA海外協力隊に参加したことをきっかけに、自分の職種を活かしてまたボランティア活動を再開してみたいと思い、エクアドルへ。国や地域を問わず、誰かのために、身体の源である食の安全を確保するサポートをずっと続けている。

理想と現実の乖離にくじけず、 一歩ずつ前に進むことを決めた。

米村さんの配属先はポリバル県庁の食品検査センター。JICAへの要請は公認の食品検査センターとして認証を取得することだったが、予算や人員体制などから考えると非現実的な状況。そこで、米村さんは検査センターの基礎である衛生面での管理だけでもしっかりしたいと日本の「5S*活動」の概念を伝えようと考えた。そこで直面した問題が、職場で唯一の同僚との関係だ。

「2人で協力して活動を前進させたいと考えたのですが、やる気がなく、こちらが提案しても全然受け入れてもらえなかった。そこで、まずは検査センター内部の写真をたくさん撮り、どう変えた方がいいと思うかを紙に書いてもらって、現状の問題点を共有するところから始めました」。すると、次第に米村さんの熱意が伝わり、一緒に改善点を考えてくれるようになった。

*「整理」「整頓」「清掃」「しつけ」の頭文字のSをとったもの



ラジオ局で食品衛生について話させてもらった



ポリバル県庁食品検査センターにて同僚と水の微生物検査



県庁に飾るクリスマス用の家や人形を作るため、木などの材料を集めに

自ら積極的に動いていくことで、 出会いと関係が生まれていく。

「折角なので、検査センターの活動以外でも何かできることをしたかった」と米村さん。現地で頻りに食中毒が起きていることを知り、地域住民の食品衛生意識を改善したいと、啓発活動の場を設けてもらった。食品市場の関係者は、アジア人が頑張ってスペイン語で説明しているということで、興味深く米村さんの話を聞いてくれた。

また、カルナバル(謝肉祭)のパレードに、職場のチームとして参加したこともよい思い出だ。1カ月前から準備やダンスの練習をして本番を迎えたとき、仲間になれたと喜びでいっぱいになった。

当たり前と流さずに 取り組む姿勢の大切さに気付いた。

エクアドルで少数派のアジア人として生活し、当たり前と思っていたことが当たり前ではないことに気付いた。向こうでは時間通りに来ない。謝らない。仕事より家族、楽しいことが優先される。しかし、帰国後、「日本人は(仕事に)時間通りに来るけど、帰る時間を守らないでしょ」と言われたことを思い出し、日本の当然のような残業について考えさせられている。現在は、常識と知っていることが、自分の周りだけの常識ではないかと疑うことを忘れず、まずはいろんな考え方を受け入れるようになった。固定概念にとらわれず、一つひとつの検査を丁寧に、また周囲の意見に耳を傾けるなど、復帰した仕事に活かしている。



食中毒菌などの微生物や表示のない添加物が入っていないかを検査



上司に
聞く!



枚方市保健所
所長
白井 千香さん

自らが考え工夫し、現地スタッフと作業環境や効率を改善する支援をしてきただけに、ちょっとやそっとの困難には屈しない内面のたくましさが増したと思います。信念を通しつつ、臨機応変に周囲の状況を把握しながら、次に何をすべきかを明確にする姿勢は他の職員も見習うべきところだと感じています。

受動的な検査仕事から、予防という 自発的な啓発活動までカバーしたい。

米村さんの仕事は、生活していくうえで切り離せない食品や感染症に対する衛生検査。現在*は新型コロナウイルス対策一色の保健所だが、コロナが収束しても、地域住民の健康を守るために必要であり続ける業務だ。自身が行っている衛生検査が少しでも衛生面の改善の一助になることができればと真摯に取り組んでいる。

また、既製や調理済み食品で起こった食中毒に対する検査はもちろん、苦しむ人がいないようにまずは予防を重視し、地域の衛生意識を向上させることで食中毒や感染症が起こらない環境づくりに注力したいと考えている。

*2021年1月取材時

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 一歩踏み出すことで、かけがえのない出会いがありました。

活動はもちろん、生活そのものを通して、日本では得られなかった喜びや楽しさ、参加しなければ関わりのなかった人との出会いなど、これからの人生でプラスになる経験をしました。エクアドルの人々に日本人の考え方も知ってもらえたと思いますし、すべての出会いに意味がありました。

世界中の“障がい”のある人々を支援し、一人でも多く笑顔にしたい。



宮嶋 愛弓

AYUMI MIYAJIMA

赴任地



ベトナム

赴任地での職種(活動分野)
作業療法士

大阪府大東市
四條畷学園大学 リハビリテーション学部 講師

高校2年の春休みに、姉と2人でベトナム縦断旅行に挑戦。路上で物乞いをする障がいのある子どもたちを見て衝撃を受け、作業療法士になることを決意。2007年にJICA海外協力隊としてベトナムへ渡る。現在、四條畷学園大学で講師として後進の育成に携わり、在日ベトナム人のための活動にも尽力している。

子どもに、世界に、関われる、作業療法士の育成を。

宮嶋さんが、大学に入学してきた一年生に必ず話すことがある。それは、自分が作業療法士となった経緯とJICA海外協力隊での経験、そして作業療法士が海外で活躍できる仕事であること。宮嶋さんの話を聞いて、国際協力に興味を持つ学生も少なくない。

現在の日本では、少子高齢化のために高齢者のリハビリテーションが中心だが、ベトナムをはじめとする途上国では障がいのある子どもたちを対象にした発達領域のニーズが非常に多い。「自身の経験を

生かし、子どもにもしっかり関わっていきける作業療法士を育てるとともに、海外に興味を持った学生が一步を踏み出す後押しをしていきたい」と宮嶋さん。

海外からの支援もあってベトナムに作業療法士の学校ができ、昨年初めて卒業生が誕生した。「将来、両校で協定を結んで、スタディツアーやシンポジウムなど、教員や学生の交流をしていきたい」。その架け橋となるのも、今後の目標の一つだ。

相手への理解と信頼がなければ、正しいことでも伝わらない。

宮嶋さんが配属されたのはホーチミン市障がい児整形外科リハビリテーションセンター。当時のベトナムには作業療法士がおらず、理学療法士への作業療法の技術伝達と環境整備が目的だ。赴任当初、子どもたちが嫌がっているにもかかわらず訓練をされている姿に衝撃を受けた宮嶋さん。子どもの気持ちを尊重し、主体的にできる訓練をするべきだと思ったが、外部から来た若い外国人が下手なベトナム語で伝えても受け入れてもらえないと考え、まずは信頼関係を築くことを意識。日本での対応方法(支援方法)とは異なると感じて否定せず、作業療法的手段や目的、自分の向き合い方を根気よく示していった。環境面や物理面を変えるより人を変えていくことが、2年間で一番苦勞し、難しかったことだ。



地域の支援学校での音楽療法



クチ郊外にて作業療法での感覚遊び



障がいのある子どもたちとの交流

楽しみながら挑戦しようという姿勢が、現地の人々に受け入れられた。

現地でもう1つ大きなショックを受けたことがある。それは、金銭的な問題などでセンターにすら来られない子どもが大勢いたことだ。ここで活動しているだけでは駄目だと、休日を使って郊外に行きボランティア活動を始めた。また、患者が少ない時は併設の障がい児デイケアに行き、寝たきりで過ごす子どもたちのために発達段階に応じた介助方法などを指導していった。プライベートでは、同年代の同僚たちと遊んだり、食事や旅行に行ったりとベトナムの生活を満喫。語学もどんどん上達していった。何事にも積極的に挑戦し、トラブルさえも楽しみながら、現地に溶け込もうとするうちに、現地の人々から受け入れられるようになった。同僚たちも宮嶋さんの言葉に耳を傾けるようになり、子どもたちも笑顔で訓練できるようになっていった。

自分の経験を伝えていくことで、支援はもっと広がり、深められる。

帰国後、宮嶋さんは臨床の現場でベトナム難民在住地域での訪問リハビリに携わる傍ら、大学院に進学した。活動中に国際的に活躍するためには学歴が必要だと知り、もっと深く勉強し直したいと考えたからだ。当初は研究と臨床に専念するつもりだったが、縁があって大学で学生たちに作業療法を教えることに。そこで、人を育てることの素晴らしさと楽しさを知り、教育の道へ進むことを決めた。「ベトナムでも教えるということはやってきたが、それは作業療法士ではなく理学療法士に対してだった。また、自分が目の前の1人を支援するよりも、作業療法士を100人育てればより多くの支援ができる」と、より大きな社会貢献につながると考えたからだ。



たくさんの出会いと支えがあって今の自分がある、その恩返しを。

勤務先の大学以外でも、専門学校・自立生活支援センターでの講師、ベトナム語の通訳・翻訳、就労支援作業所での支援と、語学と専門的な知識・技術を生かして多忙な毎日を送っている宮嶋さん。「フルタイムで働きながら3人の子育てをしていると話すとき驚かれますが、ベトナム人から教わった“なんとかなる”の精神で楽しみながら乗り越えています。家族を大切にすることもベトナムで学んだことの一つ。自分自身の人生や仕事が幸せでないと、他人の幸せまでは考えて支援できない。これからも自身の経験からどのように社会貢献できるかを常に考えて行動していきたい」。そんな宮嶋さんを動かす原動力、それは「ベトナムで支援してもらったから今の私がある、その恩返しをしたい」という、感謝の想いだ。

上司に聞く!



四條畷学園大学
リハビリテーション学部 教授
銀山 章代さん

視野が広く、様々な視点から物事を見ることができる宮嶋さん。海外での経験は、価値観の多様性を受け入れる根幹となり、作業療法士としての対象者を捉えることの幅広さと豊かさにつながっていると感じます。これからも、作業療法士を目指す学生たちにその貴重な経験をぜひ伝えてほしいです。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 何でもやってみよう、楽しもうの精神で!

任地では新しい出会いとともに、思いもよらない状況や様々なトラブルが待ち受けているかもしれませんが、でも、それらを不満に思うのではなく楽しむぐらいの気持ちで、目の前を焦らず慌てず諦めず一つひとつ進めていってください。2年間で得られる経験は、帰国後、想像もつかない自分へとつながっていきます。

より伝わるようにすることで、 社会に様々なベネフィットを届ける。



織田 芳孝

YOSHITAKA ORITA

赴任地

 **インドネシア**
赴任地での職種(活動分野)
デザイン

兵庫県伊丹市

オリタ企画(個人事業主) / フォトグラファー

大学卒業後、JICA海外協力隊としてスリランカでサッカーの指導に携わる。帰国後、サッカーコーチを務めながらデザインを学ぶ。2005年、スマトラ島沖地震の支援のため、短期派遣でスリランカへ。その後、国内菓子メーカーに勤務。39歳までという年齢制限(当時)を目前に、再びJICA海外協力隊に参加。インドネシアへ赴く。

自身の技量を試す挑戦心と身軽さは、海外での経験が土台に。

フォトグラファーとして活動する織田さんは、撮影のほか、デザインや企画、コンテンツ制作などに関するコンサルタント業務もこなすマルチ広報マンだ。2度のスリランカ渡航の後、菓子メーカーにデザイナーとして就職。パッケージや販促ツールなどを制作。さらに、マネージャーとしてブランド開発、商品企画や店舗開発、Eコマースの運営、知財管理などに携わると同時に、種々の撮影業務も担当した。

インドネシアからの帰国後は、企業に属さずフリーランスの道を選ん

だ。それは自分自身の価値や技術を試したいという思いがあったのと、インドネシアでの活動を通じて自分で物事の是非を判断する責任と楽しさを知ったから。「世界は広くて狭い」現代社会において、会社や国という枠にとらわれず、クライアントとは異なる視点で商品やサービス、活動のベネフィットを世の中に発信し、人々の豊かな暮らしに貢献する。それが織田さんの仕事だ。

ギャップがない、ことが 一番のギャップだった。

任地は東部インドネシアの拠点、南スラウェシ州マカッサル市。同州中小企業協同組合局に新設されたパッケージセンターで、現地のパッケージデザインレベル向上に取り組んだ。中小企業が自社商品の持つ可能性を高めるため、法令遵守や経済性、安全性などを考慮したパッケージを中小企業が自ら考案する、またはデザイナーと協業して完成させることを目標に支援活動を進めた。一からのセンターの立ち上げだったが、理解ある上司と優秀な同僚に恵まれ、織田さんの活動は驚くほどギャップに悩まされることがなかった。センター開設から活動終了まで、支援を実施した企業は182を数えた。



コンサルティングの様子



パッケージを制作した企業と



マカッサルデザインコミュニティ立ち上げ

“良いデザイン”とは、を伝え、 一緒に考えていく。

織田さんが一番印象に残っている案件は、地方の講習会で出会った女性から相談された自然由来の材料でつくった洗顔剤のパッケージ。最初はあれもこれも言いたいというデザインだったが、伝えたいことを一緒に整理し、パッケージの形状も変更したところ、売上が倍になった。

織田さんの考える“良いデザイン”とは「目標を達成できるコミュニケーション手段。インドネシアでは、あなたの代わりに消費者に商品の魅力を伝えてくれるものと話していました」。

各地を回って講習会を行いつつ、インターンを受け入れるなどデザイン制作に関する様々な指導を行った。また、自身の任期終了後も見据え、デザイナー、印刷会社など外部人材や団体と連携し得るコミュニティを立ち上げた。織田さんが残した“良いデザイン”は、きっとインドネシア東部の中小企業の発展に資するだろう。



変更したパッケージ

世界の課題を実体験できたことは、 今に生きる大きな力に。

インドネシアは多民族多言語国家で、約300の民族、約700の言語が存在すると言われてる。多くの民族が共生する中で、国が一つになるために「多様性の中の統一」という国是が掲げられている。織田さんは現地での生活を通して、様々なバックグラウンドをもつ人々が、色々な働き方、暮らし方をして、一つの社会を形成していることを目の当たりにした。言語や地域特性の違いという多様性を理解し、それをどうデザイン、商品開発に生かせるかを実体験できたことは大きな経験となった。また、日本でも世界でも解決すべき課題として事業活動と切っても切り離せないSDGs。インドネシアでその課題を間近で見たり感じたりできたことは、SDGsを具体的にイメージできる力となって織田さんの今に生きている。



目の前の人の方になることが、 社会や世界につながっていく。

帰国後もSNSを通じて、インドネシア時代の同僚からデザインに関する相談を受けたりするなど、インドネシアとのつながりを大切にしている織田さん。「現在、個人で事業を行っており、社会に対して企業のような大きなことはできません。しかし、私の経験を生かして発信していくというお手伝いはできと思っています」。一対一のつながりは一見すると小さいが、それが連なることで世界につながる。「私と関わった人たちはインドネシアとつながり、インドネシアの人々も私を通じて日本とつながっています。グローバルという言葉がありますが、まさにその視点で地域社会と関わりながら、私という存在が地域と地域、国と国をつなぐきっかけになれば良いと思っています」。

元上司に
聞く!



株式会社長崎堂
取締役副社長
荒木 志華乃さん

自分の与えられた仕事に妥協することなく、とことん極めるための努力や研究を怠らない人です。30代での仕事の取り組みを通じて、そして協力隊で得た経験から、以前の仕事に挑む際の近寄りやすい雰囲気も丸くなり、人との関わり方も相手に寄り添えるようになったと思います。誰にでも優しく、思いやりの心をもって接することができる人です。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 迷うより、まず挑戦してみてください。

社会がどんどん変化していく中で、JICA海外協力隊の経験はその変化に対応する力を身につける良い手段です。異国、異文化、新しい環境に身を投じることは不安もあるだろうし、大きな決断がいると思います。しかし、長い人生のうちのたった2年間のこと、とも考えられます。興味があって、タイミングも合えば、ぜひ飛び込んでほしい世界です。

常にマイノリティの視点を持ち、 社会から取りこぼされる人々を救いたい。



山口まどか

MADOKA YAMAGUCHI

赴任地

 エルサルバドル

赴任地での職種(活動分野)
防災・災害対策

兵庫県神戸市

NPO法人多言語センターFACIL

大学を卒業し、一般企業で働いた後、西宮市の消防士に転職。8年間勤務し、次のステップを考えていたときに、偶然「防災・災害対策」職種での要請を発見し、JICA海外協力隊へ応募。エルサルバドルで活動する。現在は、NPO法人多言語センターFACILに勤務。

外国人として暮らした経験を、地域の多言語化・多文化共生のために。

FACILは、阪神・淡路大震災での在日外国人向けボランティアがきっかけでできた団体。様々な通訳や翻訳を仕事として引き受けつつ、病院での通訳を患者さんが負担しやすい料金で提供する仕組みづくりなど、社会貢献事業を行っている。また、依頼を受けた業務を日本に住んでいる外国人に発注することで雇用創出にもつなげている。

「帰国後、エルサルバドルで活動した経験を活かし、多様な人に多

様なかたちで関わられる仕事がしたいと思った」と山口さん。現在は、同社で依頼主と翻訳・通訳者をつなぐコーディネーターとして活躍中だ。JICA海外協力隊で外国人として暮らしたからこそ母国から離れて暮らす人の気持ちがわかる。現地の人から受けたやさしさの喜びを知っている。だから、今度は日本で暮らす外国人の人々のためにも、地域の多言語環境の促進に貢献したいと力を尽くしている。

市民のトラブルのために スタッフの一員として即戦力で活躍。

山口さんが活動期間中の大半を過ごしたのが、サンビセンテ市役所の危機管理課。日常業務のサポートとして、市内の危機管理全般、水路清掃、火災や倒木の対応をはじめ、各地の学校での防災教育、市職員への救命講習など、市内を忙しく飛び回った。それはまさに「街でトラブルがあれば出かけていく何でも屋さん」。山での作業での昼食は野生フルーツを自分でちぎって食べたり、木に登って作業するのに命綱がなかったり、消防士をしていた時は異なるハードさも。「最初は経験したことのない暑さや衛生環境に体調を崩しがちでしたが、帰国時には日本にいた時よりたくましく健康になっていました」と振り返る。



サンビセンテ市での山火事消火活動支援



サンビセンテ市での水路清掃活動支援



サンビセンテ市内の学校での防災授業

同僚として、友人として、 出会えたすべての人々に感謝。

多忙な日々にも「職場のみならずチームワークも良く、一緒に過ごせた時間のすべてが楽しかった」と山口さん。同僚は性別も年齢もバラバラだったが、毎日顔を合わせているうちにどんどん仲良くなっていった。また、オフを利用して地域のバスケットボールチームに所属したことで友人も増えた。「病気になったら誰かが食べ物を持ってきてくれ、困ったことがあると必ず誰かが助けてくれた。日本人としてではなく、現地の普通の友人として接してくれたことが本当にうれしかった」。帰国した今も、彼らとは頻りにオンライン上でやり取りをし、クリスマスにはプレゼントを贈り合う仲だ。

「やった方がいいな」と思ったことは、 必ず提案し、挑戦してみる。

現在の職場との出会いはまさに「運命」。通常、NPO団体が常勤スタッフを募集することはほとんどないが、山口さんがハローワークを訪れたタイミングで偶然求人票が出ていた。「私はJICA海外協力隊の経験が活かせる仕事が、FACIL側も希望通りの人材がすぐに見つかったので、お互いに縁だと驚きました」。

JICA海外協力隊に参加したことで、日本社会を一步引いて客観視するようになり、日本の当たり前にとらわれなくなったと山口さん。そんな考えを受け入れてくれる懐の広さが今の職場にはある。「誰かの役に立ちそうであれば、すぐに、何でもやらせてもらえるのは大きなモチベーションです。本当に困っている人を優先的に助けられる。公務員や大企業だとそうはいかない」。



山口さんの働きぶりや提案力には同僚も一目を置く



困っている人を助けることは、 自分たちを助けることになる。

エルサルバドルでの日々は、人と人、人と動物、人と自然の距離が近く、また生と死が隣り合わせだった。「日本では一人で何でもできることがよとされる。でも、そんな能力は自慢にもならない。むしろ自分の周りに助けてくれる人がいないことが本当の恐怖だと知った」と山口さん。

「今の時代、外国人に限らず、誰がいつマイノリティになるかわからない。マイノリティの人をそのまましておかない社会にしたい。それは結果的に日本社会を救うのと同義ではないかなと思っています」。これからも立場の弱い人の視点に立ち、様々な「気づき」を地域や行政に発信していきたいと考えている。

同僚に
聞く!



NPO法人多言語センターFACIL 事務局長
李 裕美さん

初日からただ者ではない働きぶりでも「何も教えなくても自分で調べてできてしまう人なんだ」と目を見張ったのを覚えています。その後も期待を裏切ることなく、素早い行動と的確な判断力を発揮しています。現在も大学院で防災について研究されるなど、その努力に頭が下がります。これからも思う存分に力を発揮してください!

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 一生懸命の2年間は、自分を変えてくれる。

任地も、人間関係もそれぞれだと思いますが、とにかく元気にたくさんの友人を作ってください。日本にいたら知り合うことなかった人たちとの出会いは一生の思い出ですし、2年間自分の無力さと向き合い、試行錯誤しながら異国で一生懸命生きるという経験は、今後の人生で大きな糧となります。

答えのない課題に対して自分で考え、行動する力を身につけてほしい。



新井 教 諭

NORIYUKI ARAI

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
小学校教育

京都府京都市
京都教育大学附属高等学校 地理歴史科教諭

大学院を修了後、地理歴史科教諭として京都で就職。教育現場においてグローバル人材の育成が叫ばれる中、そのためにはまず教員がグローバル人材にならないといけないと考え、現職教員特別派遣制度を利用してJICA海外協力隊に参加する。サモアでの2年の活動後、赴任前と同じ京都教育大学附属高等学校に復職。

自分のために、生徒のために、立ち止まらず考え続けていきたい。

府内で唯一の国立高校である「京都教育大学附属高等学校」。教員養成系大学の附属校として、大学との共同研究を反映させた授業など、有効な教育方法をいち早く採り入れている。

同校で地理・歴史科教諭として、3年生の担任を受け持つ新井さん。JICA海外協力隊の経験は、オセアニア・ポリネシア地域を扱うときや、世界の貧困やSDGsの授業の際に活かされている。また、JICA海外協力隊が縁で知り合った人々を外部講師として招き、国際理解や

人権学習の特別授業を企画。教員以外の大人と接する機会を設けることで生徒の視野を広げ、将来の選択肢を増やしてほしいと考えている。

新井さんは、現代社会では答えのない課題に向き合える人材育成が求められており、教員数の確保や日本の小・中・高等教育モデルの実態が理想に追いついていないと言う。「現状の教育界に問題は多いですが、諦めないで考え続け、行動することが大事です」。今日も模索しながら、新井さんは教壇に立つ。

自分から輪に入ることで、お客様から、信頼される先生へ。

赴任先はサモアの首都アピアから40km離れたレウルモエガという田舎村。そこにある全校生徒およそ100人の小学校で新井さんは算数と理科を教える予定だった。しかし、着任当初はサモア語があまり話せず、完全にお客様扱い。このままではいけないと、自分ができることを積極的に提案。一つずつ誠実に行っていったところ、徐々に周囲の評価が高まっていった。現地の人の輪に自ら飛び込み交流することでサモア語も上達し、任される授業もどんどん増えていく。特に子どもたち一人ひとりと真剣に向き合う姿勢は、「勉強が嫌いな子だったのに計算ができるようになった」「学校に楽しそうに行くようになった」と保護者からの信頼につながった。



理科の授業用の板書(小4ライフサイクル)



ラグビーの指導も行った



サモア国レウルモエガ村で算数の授業(小3掛け算)

先生として以上に、村人として認められた。

現地の人と距離を縮めるきっかけとなったのが、新井さんが学生時代に打ち込んでいたラグビー。サモアはラグビーが盛んな国で、楕円のボールと一緒に追いかけることで自然と人間関係ができていった。子どもたちにラグビーを教えることはもちろん、小学校の全国大会に付き添ったり、ルールに詳しいからと審判として重宝され、地区大会で主審を務めたことも。放課後や休日子どもたちと一緒に過ごした。

帰国の際には、新井さんが行く先々で送別パーティーが開かれた。赴任校では、学年ごとに子どもたちが出し物を披露してくれたほか、保護者や地域の人々も大勢駆けつけて別れを惜しんだ。新井さんが教員として人間として、サモアの人々に愛されていた証拠だ。



いつでも、どこでも子どもに必要なことは同じ。

サモアでの2年間で振り返って、「国が違っても、年齢が違っても、教科が違っても、教師として大事なものは同じだとわかったのは大きな財産」と語る新井さん。それは、目の前の子どもをリスペクトして向き合うこと、子どもの成長のためにどうすれば良くなるのかを常に考えることだという。現在、高校で担任するクラスの生徒は約40名。授業準備や部活指導で忙しい毎日、一人に割けるコミュニケーションの時間はどうしても限られてしまう。しかし、自分の受け持つ生徒一人ひとりとしっかり向き合い、彼らがどのようなことを考えて、感じているのかを聞き逃さないように意識している。



部員2名の硬式野球部の顧問を務める



教師が与えるのは、きっかけや選択肢の幅。

個人一人の力で、社会の課題を解決するのは無理かもしれない。しかし、教師という仕事をしている自分は、生徒たちにきっかけを与えることができる。海外の教育現場での経験や実体験を通して知った途上国の問題を伝え、世界に関心を向けよう、困った人を助けようというメッセージを発信することで、受け取った生徒たちが社会にある多様な問題に気づき、自分で考え、選び、行動していつてくれるかもしれない。

「自分はこれからも教員としての人生を歩みますが、生徒たちの未来は様々に広がっていきます。一人ひとりが強みを活かして社会で活躍できるように後押しすることで、より良い世界につながっていくと思います」。

上司に聞!



京都教育大学附属高等学校 副校長(理科) 岡本 幹さん

常に生徒のことを第一に考え、指導にあたられている新井さん。海外での自らの経験を還元した授業は、きっと生徒たちにとっても得るところが多いでしょう。また、JICA海外協力隊によって広がった人の輪を活かし、様々な学びの機会も提供されています。本校という枠を飛び越え、広く有意義な教育活動に取り組まれることを期待しています。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 挑戦という楽しさを実感できるチャンスです。

JICA海外協力隊の2年間で人間的に成長できまし、考え方も大きく変わりました。見知らぬ環境に身を投じるには大きな困難が伴います。しかし、同時に、挑戦することの楽しさや日本では経験できない達成感を得ることができました。今後も常に様々なことに挑戦していきたいです。

地域の人々の健康を支え、 安心できる医療を届けたい。



笹川 恵美

EMI SASAKAWA

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
診療放射線技師

和歌山県橋本市
医療法人南労会紀和病院 診療放射線技師

放射線技師専門学校を卒業後、技師として関西圏の病院に入職。
ヘアドネーションをきっかけに、誰かのために行動することは難しくないと気づき、
自分の技術を活かして海外で働くことは可能かを視野に入れて検討するうち
JICAの活動と要請内容を知る。現職派遣制度を利用して、赴任地へ。

自分と職場のレベルアップを図ることで、患者様に最善の医療を。

和歌山県橋本市、この地域の中核病院として地元の信頼を集める紀和病院に、笹川さんは勤める。診療放射線技師として、通常のレントゲン撮影のほか、マンモグラフィ、CT、MRIなどの機器を扱い撮影を行う忙しい毎日だ。

笹川さんがJICA海外協力隊への応募を決めた時、紀和病院に現職派遣制度はなかった。上司に相談したところ、見知らぬ環境で医療貢献を図ろうとする笹川さんを応援してくれ、すぐに制度を整えて

くれた。活動を終えて帰国した現在も、ボリビアでの経験を院内にレポートしてほしいと院長から依頼されるなど温かく迎えてくれている。

ボリビアでは、教職に近い役割を担ったが、学ぶことも多かった。今後さらに自分磨きを忘れず、安全面に気を付け、医師の指示を受けて適切な放射線検査を行っていきたい。そのためにも、日々自身の専門技術の向上に向けて勉強時間を増やすなど、できることから一つずつ実践している。

言葉のほか、学校や生徒について、 まずは自分が学ぶ側に立つ。

笹川さんが赴任したのはボリビアの医療系専門学校。レントゲン技師の養成クラスに配属され、生徒への指導と、教科書の見直しや新しい副教材づくりなどの支援を行った。生徒は高校を卒業したばかりの若者から、40歳近い中年層までさまざま。全員が手に職をつけたいと熱心に学んでいた。当初、授業をスムーズに進行するには拙かったスペイン語は、大量の副教材づくりで鍛えられ、会話力も向上して、徐々に教える立場として信頼を得られるようになる。その後、「真面目な話だけでなく、昼食時に冗談を言って笑い合える関係になれてうれしかった」と笹川さんは言う。言葉が下手でも、分からないことだらけでも、悩みよりまずは進んだ結果だ。



語学研修中のホームステイ先



撮影実習



日系学校のお仕事教室

新型コロナから身を守る 手洗い講座を自主企画。

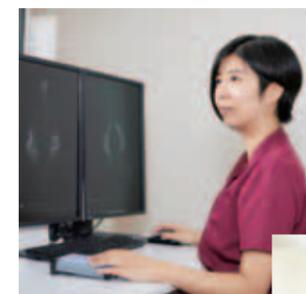
ボリビアの医療格差は大きく、貧しい人は病気になっても適切な治療を受けにくい。一般に手洗いの習慣がない彼らに新型コロナウイルスから身を守ってほしいと、笹川さんは帰国前に手洗いの正しい方法、大切さを説くポスターを制作。上司に掲示場所を相談に行くと、とても関心を持ってもらい、急遽手洗い講座を実施することになる。手にウイルスと仮定した色を塗って、人と握手をすると相手の手に色(ウイルス)が移るなど実演を交え、石鹸を使って手を洗う重要性を説明した。ポスターを作って終わりではなく、現地の人と直接コミュニケーションを取りながらコロナ予防を実践できて、より「やってみて良かった」と思った。

(2021年1月に取材)



世界には、 多様な価値観があると知る。

世界の多様性を知ることができたとともに、自分がどこにいても自分の根本は変わらないと気づいた笹川さん。現地の人と違うことは当然で、同じ任地に滞在する他職種のJICA海外協力隊員もさまざまな考えを持っている。それぞれの考えやできる事が違うので、自分の尺度だけで考えてたどり着く先は必ずしも正解ではないと感じるようになった。元の職場に戻ってからも、以前より広い視野で周りを見られるようになり、ドクターや同僚、患者の意見や気持ちをくみながらコミュニケーションをとるようになった。また帰国後、日本はボリビアと比べてルールが多いと感じた。ルールにすべての判断を任せる日本人は考えることが少ないのではと危惧するようになった。



迅速に正確な情報を
医師に渡すことを心がけている



患者様の負担や不利益を減らす、 自分にできることを始める。

いったん技師という医療現場の仕事から離れ、他人に教える立場になったことで、自分の撮影技術を客観的に振り返ることができたという笹川さん。より丁寧な質の高い検査を行えるようになったそうだ。笹川さんは今後、ボリビアでの指導経験を活かして、病院の後輩育成にも力を入れたいと考えている。誰が撮影しても、患者の負担が少なく、精度の高い画像を提供できるように、自分を含めた放射線技師のレベルアップを図るつもりだ。

また、ボリビアでは、現地の人が見たことも聞いたこともない医療機器を怖がる姿を見て、安心して検査を受けてもらう重要性を実感した。「日本でも、説明不足によって不安を抱えながら検査を受けている人がいないか心を配りたい」と笹川さんは努める。

上司に
聞く!



医療法人 南労会 紀和病院
診療技術副部長
國眼 勇さん

仕事は迅速で、忙しい困っている場所に対して積極的に手伝いに行く笹川さん。帰国後、先輩や後輩の意見を聞く姿勢が向上したように感じます。昨今、海外労働者の雇用が増え、外国人の診療や健康診断も増加しています。彼らが日本の医療機関にかかる際には戸惑うことも多いと思うので、橋渡的な役割も担ってほしいです。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 楽しい!に尽きる、やりがいのある2年。

一度だけの人生で後悔はどうしても残ると思いますが、誰かのために、誰かと共に頑張った経験は自分を支えてくれる力になります。現地の同僚のほか、さまざまな職種で活動するJICA海外協力隊のメンバーたちと知り合い、いろんな話を聞くことができたことも貴重な経験でした。

栽培しやすく美味しい野菜づくりと食文化を豊かにする手伝いを。



戸口 誠仁

MASAHITO TOGUCHI

赴任地

コロンビア

赴任地での職種(活動分野)
病虫害対策

奈良県天理市

大和農園 種苗販売部

学生時代は教員を目指し、人に指導するために知識を蓄えたいと大学院へ進学。院卒後、今度はもっと社会を知りたいと感じて、JICA海外協力隊に応募する。コロンビアで植物病理学の視点から研究アドバイスをを行い、帰国後、大和農園に勤務。日本はもちろん、世界の野菜の品質向上に注力している。

そこで求められる野菜づくりを、一緒になって考える。

1920年の創業から、時代のニーズに合わせた新品種の育成に取り組む大和農園。主に野菜の品種改良を行う企業で、戸口さんは営業担当として日本中の種苗店を駆けまわっている。

きっかけは、コロンビアから帰国後の報告会。戸口さんの活動に関心をもった大和農園から声がかかった。知らない業界、そして学生時代はなりたくない職種だった営業という仕事に驚きはあったものの、国内外と様々な地域に行き、人と知り合い、学んできた知識と経験を前

線で活かせる内容に惹かれて入社。実際に、全国各地を訪問して、産地がそれぞれに抱える課題を聞き取り、品種提案や技術情報を提供する仕事にやりがいを感じている。

最近、JICAの中小企業支援案件でミャンマーを訪れ、特産もやし種子の収穫量を上げるための栽培指導と、獲れた種子の発芽率や純度を高めるための調整指導などにも協力。野菜の生産性や食味を高める戸口さんの仕事は、日本で、世界で、求められている。

自分が持つ知識や技術を伝えたくて、仕事を探すことからスタート。

戸口さんがコロンビアに着いた時、当初想定していた仕事になかった。本来は政府管轄下で研究室を整備し、コロンビアの財産でもあるバナナや珈琲などの果樹園を守る解決策を練るはずだった。しかし、ボランティア要請があってから赴任までの間に政権が交代し、研究室を立ち上げることができない状況に。まずは近隣の農地を巡回して野菜や果樹の病気に関する指導から始めるが、検査もせず「見る」だけの指導では「だと思っ」しか言えず、歯がゆい。自分の役目は何か。模索する中で、近隣大学で研究アドバイスをを行う仕事をきっかけに大学の研究室からオファーがあり、所属先を変更。こうして、病虫害対策を指導する体制が整った。



同僚と植物病害の分析中



同僚と植物病害の調査中



農家に植物病害の説明をしている様子

仕事や新しい学問に対する姿勢が違う中、共に現地の将来を考えることが大事。

コロンビアには植物病理学という学問がなく、その重要性は理解されにくかった。屈託のないコロンビア人だが、気楽な性質が仕事にも影響して、なかなかプロジェクトが進まない。戸口さんは積極的に栽培指導を行い、研究に対する技術や知識を提供し、理解者を増やしていった。国立大学の研究チームに参加して以降は研究指導を行い、植物病理学の重要性を感じてもらうことで、帰国後のコロンビアの植物を守れる人材育成につながった。「正しいと思ったことは第一線で主張して、みんなを引っ張り上げて良い方向に向かわせる。それが、JICA海外協力隊が赴任する意味だと思う」。帰国後の赴任地を想像し、行動した戸口さんの想いは、周囲の人々に伝わっているだろう。



相手の意見にじっくり耳を傾け、自分の意見もしっかり伝える。

日本の常識は通じない環境、文化や考え方が異なる人々との出会いを経て、「違うことが面白い」と考えるようになった戸口さん。さらに、主張の強いコロンビア人との討論でメンタルも鍛えられた。この経験は、営業として新たな場所に行き、知らない人と会話するうえで大いに生きている。各産地の事情や考え方を否定せず、なぜそのような状況なのか背景を想像する。もちろん自分の意見もしっかり述べる。お互いに思いを伝えあうことがより良い結果につながっていく。向こうで得た自分とは全く異なる視点で物事を見る力、固定概念に対して常に疑問を持つ力は、どのような場面においても役立つ。戸口さんを助けている。



スイカ苗の良し悪しについて同僚たちと協議している様子



地域の発展と食文化の豊かさは、密接に結びついている。

コロンビアには生野菜を食べる習慣がなかった。栽培技術や品種、さらに暑さの影響で野菜が甘くなり、洗う水道水も安全ではないために生で食べるとお腹を壊しやすいからだ。日本の美味しい野菜は世界的にもと贅沢品なのかもしれない。また、日本でもスーパーに並ぶ野菜は耐病性を重視した品種がほとんどで、その野菜本来の味が損なわれているものも多い。世界の、国内にもあるこの食の格差をなくし、美味しい野菜をみんなに食べてほしいと戸口さんは願う。「野菜の新品種を開発する会社で、新しい情報をいち早く仕入れ、自社の品種改良に活用することが私の考える地域貢献。そうして作った、より美味しく、より病気に強い新品種を販売していくことで、野菜づくりに悩む人々をサポートします」。

上司に聞く!



株式会社大和農園 種苗販売部 部長 内田 健志さん

お客様や生産者様の懐に飛び込むことが上手な戸口さん。相手が何を考え、どうしたいのかを想像する姿勢や、行動に計画性を持つことなどは、期限ある中で成果を最大化できるように取り組んだJICA海外協力隊での経験が大きいと思います。見知らぬ土地でも能力を発揮されたように、現在の職務でも未経験領域に挑戦し、さらに活躍してほしいです。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 参加を迷っているのなら、まずは行ってみて!

海外旅行で短期間にいろいろな風景を見るのも素敵ですが、国民性や政府の思想などを知ると、その国や地域の内面が見えてきます。文化とは言語と風土が合わさって形成されたもの。一つの国に長く住み、言葉を覚え、風土を感じることで知り得ることは多く、そこから学ぶことは人生を左右します。

疑問を持ち、考え、行動できる 国内外で広く活躍する若者を育てたい。



加朱 将也

MASAYA KASHU

赴任地
 **エチピア**
 赴任地での職種(活動分野)
体育教員

滋賀県東近江市
滋賀県立八日市高等学校 保健体育科教諭

高校時代、所属していたバレーボール部の顧問がJICA海外協力隊のOVで、話を聞くうちにアフリカやJICA海外協力隊に興味を持つ。大学在学中に応募し、卒業と同時にエチオピアへ。その後、ヨルダンでシリア難民支援にも携わる。現在は、滋賀県立八日市高等学校で保健体育科教諭として教育活動に従事。

現在も、日本で、世界で、スポーツ教育を展開中。

県下でも有数の歴史と伝統を誇る滋賀県立八日市高等学校。加朱さんは、JICA海外協力隊をはじめ海外での支援活動の後、生まれ育った土地で教職に就いた。体育科授業のほかにバレーボール部の顧問を務め、また、休みの期間を利用し、日本ラグビーフットボール協会の国際協力部門員として、スポーツを通じた国際協力の活動も行っている。

帰国からおよそ2年。加朱さんには生徒たちに伝えたいことがある。それは、エチオピアで知った、人はそれぞれ異なる環境で育ち、異なる価値観や考え方をもって当たり前だということ。自身がそうだったように価値観の異なる人々に関わる時には、悩みながらも成長していきける。その大切さを、スポーツを通して生徒たちに伝えていきたいと、日々、奮闘している。

「スポーツ」とは何か？ 現地にとっての意義を見つけ、広める。

体育教員としてエチオピアの学校に赴任した加朱さんは、軽視されるスポーツ教育の現状を目のあたりにした。「理科などに比べて体育の優先順位が低く、あまり予算が投じられない。学校に十分な設備や道具がないため、農村部の子どもたちはスポーツにふれる機会も少ない」と加朱さん。まずはスポーツ教育の意義を周知する必要があると痛感する。配属先の学校で活動が続ける傍ら、現地で活動中のJICA海外協力隊員と協力し、『ONE BALLプロジェクト』を立ち上げた。貧しい地域にはボールさえない。休日を利用して、サッカーボール1つを持ってエチオピアの地方部を周る。子どもにはスポーツをする機会を提供し、大人にはスポーツ教育の大切さを伝えるためだ。



指導者育成
セミナーの様子

同僚との体育の授業



ONE BALLプロジェクトの集合写真

現地の人の共感を得て、 結果はより大きく出た。

『ONE BALLプロジェクト』の実施に当たって、理解が得られるまでの道のりは決して平坦ではなかった。しかし、熱心に活動が続けるJICA海外協力隊員たちの様子を見て、地元でも共感してくれる人々が現れる。プロジェクトに共感してくれた協力者は現地の言葉で、活動の意義を周りの人たちに伝えてくれた。加朱さんは言う。「私たちの姿と、現地の理解者の言葉が重なる時、文化や価値観の異なる人々が協働することになります。JICA海外協力隊の活動だけでもできたかもしれないが、ここまで大きな反応は生まれなかったでしょう」。加朱さんが帰国した後もプロジェクトは後輩隊員に受け継がれ、さらなるスポーツの輪を広げ、エチオピアの多くの子どもたちを笑顔にしている。

支援から、解決へ。 先進国で教育をする意味とは。

20代の頃から、アフリカでの開発支援や中東でのシリア難民支援に携わってきた加朱さんが教職に就いた理由。それは、現地で支援活動をする大切さを認めながらも、世界にある問題の根本を解決するためには、先進国に生きる人々が変わらなければ実現できないと気付いたから。これまでの自身の経歴から、“できること”“したいこと”“求められていること”を考えた時に、3つが合わさるライフワークとして日本の教育現場にたどり着いた。加朱さんが目指すのは物事に疑問を感じ、その答えを探し続け、行動できる人材の育成。生徒たちが勉強や日々の部活動などの学校生活を通じて、その素地を得ることができる環境づくりを目指している。



授業でも、クラブ活動でも、常に笑顔が絶えない

人との関わりほど、 大切に面白いものはない。

エチオピアは世界の中でも貧しい国と言われ、十分なモノがない。しかし、現地の人々がモノではなく人と頼り合いながら生きている姿を見て、加朱さんは多くを学んだ。「生徒を見ると、日本人は他者との関わりが希薄になってきているのではと感じます」。人と関わると、当然意見の対立や考え方の違いが生まれるが、それを乗り越えて協働することで、新しい発見があり、自分を成長させることができる。また、様々な人と出会う中で、行動する動機を見つけることができる。加朱さんが実際の体験から得た、人と関わる大切さ、楽しさを、たくさんの生徒に伝えていきたいと思っている。

上司に
聞く!



滋賀県立八日市
高等学校 校長
岩田 篤夫さん

スポーツの楽しさを伝えるという強い思いをもって、より良い授業づくりに取り組まれています。コロナ禍の中で学園祭をどう企画・運営するかという時には、生徒の想いをくみ取りながら新しい発想で成功に導いてくれました。海外で得た広い視野と貴重な体験を伝え、自ら進路を切り拓いていく勇気を若者たちに与えてほしいです。

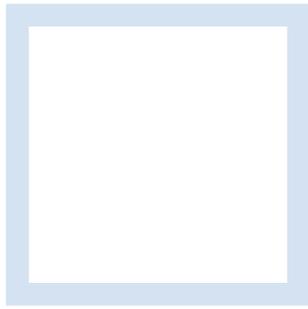
JICA海外協力隊を目指すみなさんへ

困難な状況だからこそ、外向きにチャレンジを!

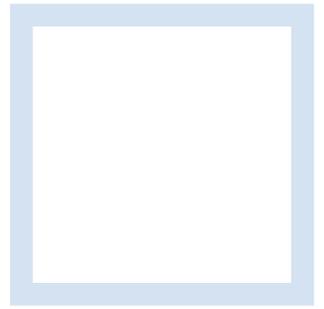
国際協力の現場では、現地の人々と日本人の関わりからたくさんの可能性や学びが生まれます。コロナ禍の現在、この関わりを持つことが非常に難しい状況ですが、何か方法は何か模索してほしいです。世界の人々は日々困難と向き合っています。内向きならず、外に向けて力強く羽ばたいてください。



ECUADOR



VIETNAM



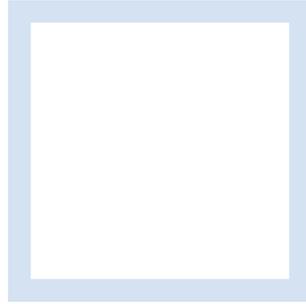
JICA海外協力隊

検索

<https://www.jica.go.jp/volunteer/>

独立行政法人 国際協力機構(JICA) 関西センター
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
Tel:078-261-0341(代) Fax:078-261-0357

INDONESIA



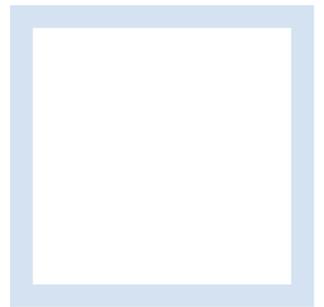
EL SALVADOR



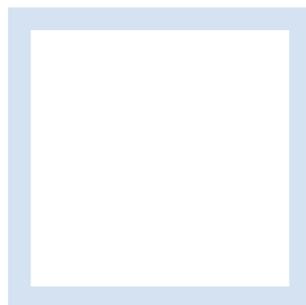
SAMOA



BOLIVIA



COLOMBIA



ETHIOPIA

